



色
集
集
四



之孫三年秋

所計とけ此常やとけりきりくす
わやとけりて 音後す。秋
秋を愛さく。月けた
な〜て〜り〜 十の意
子代強くまのものを振ほりて
号の喜ふたひ〜喜 うれ

元兆
と世成
望水
去来
角
兆

うそつゝくくり懐いとせそけりむ
まゝもたふの報とれあす
境より田のまゝやよていけきあは
か鼠の紅ハよきやしらなり
ゆくりた尻赤く名のりた
るのやくりめまき 遅迷
空移しるも雲のたれまはる
まゝらくもた菊のまゝらじ
糸あらし後一ふいよ嘆くはり
ちもこつ月あけのこつ

水 来 北 菊 水 来 菊 北 来 水

情 境 の 聖 を つ づ 西 日 の ぬ
潮 為 づ ぶ 芦 の 穂 の こ
身 の 外 に 鐘 を 隔 る 雲 と 雲 と
香 と ち ち る 石 原 の 高
入 月 不 為 糖 ひ 武 老 ひ ち
紫 井 免 一 聖 と わ や と ぬ
山 と は 昼 も 狐 の け ち ぐ ぐ
と ぬ と ぬ 来 や と 酒 造 じ

治 若 志 城 露 沾 若 若 沾 若 若 沾 若

夕の風吹くはるる。鞠の音
——くふこころの垣を花ひは
跡緒を 探の程にす——
すしけり 髪と 巻はらん
細くあきつうこれ 敷きも
何も 焼火よ 答つう——
梅の月影の 意は倍瘦く
浪つううり——の 簑し
今 泣くれ 己の 砧や 鳴わん
甲 菘も 風も 身も——

津 菘 津 菘 津 菘 津 菘 津

雪あ——に 鳩さきき 糸糸
山——わ—— 目とくふの 影
とあやや 先 髪をさつ——
浪のきね 人も ありけり
木を 換く 枕の 程とらん
肉を のさくれよ 如は 千——
かの つ—— 遠の ねとさ——
遊さふ わやに—— 正 武士

不 知 荊 口 七 世 成 女 以 柳 張 言 斜 炭 忠 風

けしき人の文さし引裂く
移るの面をおしけけなく
け育のこまやとけしき
業 移る 日の出し
為るして破すうき
細代の紐を布にむす
身の糸にうき
上落連も 梳のち、さぶ
さのうき 谷れ欠るひりつ
懸りてくまはし

知 糸 柳 糸 音 炭 糸 糸 風

月えする 産に糸しと糸も糸
産のうき 糸の糸と糸
糸とけけの糸の糸と糸
糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸

糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

寂寞とある人あふふ葉師書
 るのさしりた 露も 蚊跡をぬ
 一しりらぢうれて ぬる市の子
 送つゝ子の 食つむぢり
 用と出つゝもつゝるわあつる
 新しと結れて 別といつ
 月のおおあふ 志ひさる小巻の言
 括扱つゝる 中 書はつゝの
 位らる 髪も 若色よ 杖とれ
 大工の 換を 新く 送ま
 白 白 白 白 白 白 白 白

とつたの 猿栗や ちよれさしり
 八つさしりさる 舌の 傾き
 丁海る 白根ふ 舌の 廣く
 うら 葉る けすむ 鬱まき
 着人の 髪た けし けし けし
 そのさく ちやつゝい 下りの 白
 蘇ササのうたに 赤も けれぬ 意と
 ちよさく ちよさる ちよさる ちよ
 物モノの 急は けし けし けし けし
 ちよさる ちよさる ちよさる ちよ
 白 白 白 白 白 白 白 白

爰摺しよる新しくわけて
 採りの葉を物じたりと
 休白しおこりたるひの影を
 漢とむそのときりいよと
 なまいさるう打状をす
 いつもあがりん難のさ枝
 秋にらて又一志をりな
 うに縁甲く傍半の月
 ふ列の外とちる智の
 極はほくしてうさをり

正秀
 邇 邦 竹 末 秀 邇 邇

爰可にきく終はちぬむの
 ちけはきくしそくさ
 人々あき徳のまはえり
 彦月とせしうさおも
 うさるを過并に流る
 泊るあらの帰るさ
 硝子にるる流る申さ
 たらさあはむくは
 まじくは新は替り
 明石の城のた鼓うり

邇 邦 竹 末 秀 邇 邇

大いふにりけしやうあゝ船を
 ちりくたに似るぬ孫りいふ事
 先片れたて女の中の言及とり
 霧 澄しせぬしーのい路の月
 白ひあささくくならそ神わ
 ちよこも靴の子孫くまいおす
 白の指しよの足あいうう
 沖あけとぬ 唇やかせ たり
 夢のふさハ孫しとさうりて
 柳ハ 風の杖てう ふく

志原しき名や小松吹霧すき
 夢とみまをそくけ好す月
 せき書 佛しき秋の粒あむむ
 よーのあま戸をまねいあれ
 白帯や足踏ふくもあさふふ
 わくくたにきしーくはーせれ
 波わくく強ふわささ夫と捨い
 るふ 海先の岩とうーま

海美石

八

わすれぬ所そのふのれうをせむ
とくともうけし世にの板しき
双花よりも新花のしき
亥時のまきの仕るしゆりま
雲のてまのうははまをれたり
流るさまくの流のき流るも
大なるは持てるまに一つも
鳥よりま由る町のしき
風のふく鼓笑して流るやが
鳥流ともいふまにまをいふ

規 枝 良 鼓 流 益 存 十

おふあし年のまともおふ
ツけのふさげに罪やあつん
とくともうけし世にの板しき
花よりまをいふまにまをいふ
雲のしきも新花のしき
うしよくやらうま江の山
梅たてて白形はく今ま日
糸のまよしの雲葉つく

市 鼓 益 規 良 枝 春 世

鏡光も停良古の音に家^りひ
 砂きりりし 糸そのあは
 ねとぬくらうた思^り子の^りほそ
 いつ^の之^のほ^のの^のわ^のる^のを^の風
 賦^るや^のゆ^のさ^のあ^のり^のね^の暖^の庄
 くら^のり^のと^のり^のくら^のり^のほ^のら^のよ^のり^の月
 照
 越人

久保に奉未秋

やり^のと^のお^のて^のい^のさ^のよ^の月^のの^のを
 舟^とき^して^のあ^のき^の海^のは^の 露
 初^のめ^のあ^のて^の嘆^のも^の掛^のり^のね^の露^のの^のき^のに
 結^のも^のけ^のる^の制^のとの^ので^の流^のき
 くら^のと^の移^のし^のれ^のの^のき^のの^のら^のは
 場^のくら^のま^のり^のは^の 山^のま^のの^のけ
 七^の成
 女^の考
 治^の画
 文^の学
 水^の然
 物^の膳

糸りのたふ別と湖のこころ能

正則

石のちる居のちををよまじ

皆江

鴻雁の志とえうけてきそひは

傍香

あはる作をくくわくくはり

華香

栂もあにゆくふ傍のこころは

鬼香

湖と隔る 客の大木

正秀

月けにこころをさるうはの上

別

たくらくらくとおをくくすは

香氏

柳をさき緒と秋とくらうしん

香五

葉のくく葉とと影ををさり

香

あぐのふよきひり 友の教

香

あしと車もせうねをるの白

別

香の葉れ下はわくを吹り

暗

听するのりらふ 了忍なり

正幸

がらきつものる内は戸を所て

江

いらくめ山おさるをあるら

香

けをさき人いさるは もをさるそ

香

せめてとくくくもさるるくをさる

然

風やそ海もさるの流り

秀

たぐくくくくたの心海地

通

晴くハ古き歌のあれのころ
月又と 南ふ やうと 猿 たる
煙たに 烟の 岩や くのま
葉ひの 糖の ゆふへ びしき
くさふさふさいおりは げんげん
身ほろも た刀の 友ささき
昔 椽小 船の かつき くらたき
ほろも され 鳴て ねハ 明きたり
穢 人の 志れ わるは せる 花の け
南 おりては めくむ けつと け

業葉
子
苓
睡
魚
友
柳
院
後
五
香

あくちを かくも けり 高のきく
ころろくさくさ 音 舟の 舟由
新 島と 舟の ころの き出く
きくは くと 心の ささき なら
酒の その 瘴に 障よと 明さる
けと くと 文を くるさき

と
辰
友
柳
後
魚
越
人
如
行

夷——くはなをれ智とのうちを
 尾よあふくさ 青のまねく。
 月うけにささるとやとささるて
 露とそりりし 二よのうさ
 何のもしきを 仕舞て降にささ
 述もつれはさうよ 糸ま
 丸線に控て中しくきし能
 物のまけ志ふ 母のたしな
 茶のうけ 経金ぬのまぬく
 うめ 山ささく 糸ふくまが
 人 通 箱 口 菊 良 香 因 行 炭

酒りきき橋の尾あとの朝の乳
 丁もさすれも 湯池のあ
 去り雲の内より 石くらそめさ
 らふそくのやとをいふ夕月
 たのまいて 浪香の香まくらたは
 す~~~~乳~~~~ほ~~~~さのさる
 海五 昌房 と世 正秀 聖経 乙か

弓と矢もまゝにひらき
—— 髪は—— 出は 髪子の合と
杖や 髪子と 髪とととと
おのちのひらきたけのまの像
文はまらつて史文選とて—— 杖
花深 杖—— やる 堂の—— 杖
押したる 髪とととととととととと
子履もとととととととととと
肉象とて—— 杖は髪とととととと
つととととととととととととととと

杖 子 房 刀 色 徑 好 節 杖

月代をいらくや村—— 杖
小松のうらうらふふふふふ
と—— 花菱の透るふふふふ
あま—— 杖とととととととと
酒ささむ 杖の海やとととと
杖とととととととととととと

千川
ととと
比高
戸柳
酒堂
法勤

物とく驚む白わりと月る
 ちりきハワリ一南風の乳
 笠とれハおもいひさうけ
 ささくもきよいれむ大酒
 手鏡ハ手せむ片くに如たたり
 唇風名たてる鳥のうりや
 かつささく乳行一さすけと緒
 傷をやそのわさささつれ
 仔細の御神一紙を漕入て
 一紙の法り一文字ささる

蕨川 水 鏡 老 柳 節 石 川 盆

こころにふるる雪は道下入湯汁
 色とむく鴨をのきさるれ板
 玉乞の中と所一襦袢をさく
 はくは本履とくくさる
 梨子の枝どりしととけはれのみ
 とけふ色こきさ 芋うさのわく
 杖風一梨こしとる智の箱
 わすしのささる梨のゆき

蕨川 盆 大舟 左柳 出巻 酒巻 荊口

六月のりも思きふ 柳の本
 木敷の入り 春ふとゆるる。
 きらきらりついで 供する浄土宗
 草の面の就のときも 山陰
 花のそのまをたはに藤の花
 たもくには夏の花をきく秋
 月代もとくさやのそりなき
 手つれむてくるの飛くる
 雲ハ今朝よりとれぬをささり
 夕のくよの月る 海を

巻 柳 箱 川 寺 舟 川 箱 柳 巻

引起はるの丁まや鈴の内
 柿の葉ををぬるす 焚つけ
 つさよ結程の葉とさるし
 磯山うけお 旭の雪 一し
 床く並は松のつれぬ屋あり
 残るさくくくさるさるの結

大考 史邦 去来 中巻

人の今ね時くハ泣きの白鳥
を育も舟よりかこはる
山あふ工儀のささげ枝つさ
とりりとり川す木多の大根
これ張る葉候泣のささげ
うけくくく何も木のさ
花とらり舟も舟く人とんまの
物の時ふくくゆつたの月
楽笛ととりて今も。候の風
歩のさくくさ 庭を 撫く

考 丈 来 毫 石 邦 丈 考

鳥さくを流すくくもさくく
ふゆきくくくくくく
水の舟も候とんまのささ
葉のまをくくくくく
酒入のちいさく破花多されく
物のくくくくくくく
妍くくくくくくく
流おとらり舟も舟くく
川さりし相のさくくく
葉もその候くくくくく

考 丈 来 毫 石 邦 丈 考

りけ合よして暮るくららたつこ
はまよありる。中一五の門。
夕月とくくくくくくくくくくく
とるのけらけの名ハわきこなり
垣るに湯敷のおれ難 嘆く
かきのおむつきの干場りれる
傘さむ 史も老のまほやれ
野一口もくくくくくくくくく
おとふと掃集ていぬりたり
河くららるきと ちのかけらふ

宛 邦 来 菴 考 丈 邦 菴 来

蒼のねも 刷ぬを川一これ
引くき風の木のききぬる
坂引の物くわき川をきそ
たぬふとせらぬ 藤をりの弓
内くくくくくくくくくくく
人きもくれと 名ゆの撃

去来 史邦 凡北 史邦 宛 朱

ちなるそ路不しつ好く化て
くさくさよき 先やちの是路
何事もそらのしらいつや
アス〜うりて 年の見〜う
ほつれ〜もこの絲者のま〜う
美夢のくぬぬの ころ〜とあ
吸物ハ先おまはら〜すへせん
之とわすりのあな か〜くも
けきもるる回つ中 辰ち〜く
片〜本 つきたる 月のおほらよ

北 邦 朱 菰 邦 北 菰 朱 北 邦

若さ〜とこれより〜まぬ神
ひ〜りある〜 ちの〜ま
一河に〜るのまの〜とて
名も〜んをよ 後の 柳風
比〜り〜はこれハ〜るまの
ほ〜とまぬ人か 唱は〜る
後〜りの又 宛を〜ら〜れ
と〜ら〜と〜し〜車〜川〜む
〜き人〜を松教坊より踏〜せ
今やわ〜れの刀所〜い

朱 菰 北 邦 菰 朱 邦 北 朱 菰

幽卷四

二二

昔は〜ふん様て及をきり〜
 多し切たる死ねん〜
 きてふん月物の物居を
 湖水の物を比良のらり
 柴の戸やしも空れておとよむ
 布子よるか〜風の方へ
 押合て移てハ又立ちり〜
 たらぬものも〜まきり〜
 一〜ま〜鞆つと〜ゆ〜の〜れ
 花このちも〜に本〜り〜ま

邦 北 朱 翁 北 邦 翁 朱 邦 北

芝草をよやく 翁の月
 々々を修る 梅のけ〜の
 厚い人なき里もあ〜
 かり け〜のなとひら〜
 軟〜に 若〜のよ〜
 扇の〜と〜 舞〜

園風 梅歌 半歌 乙女 良歌 風文

曲卷四

二十三

川くわあわの屋まおのんた
 目の夢吹てもふ夕れ
 月のおとくもあ
 花しらく 雲のいとみ
 刀 扇 風 芳

きくね程々ふいふれよまのや
 火きくつきよ あまの うんあ
 一ふのほのくまうとち
 垣はあつとちまきり
 うらつれてうけはるる
 山花 花を ちきる 小坊
 秋風 大 清け 海す ちいろ
 たしこのくまを 纏て
 斜 旅
 女 行
 七 段
 荆 口
 文 香
 此 翁
 左 柳
 如 風

かつらぎのさみやうきとささの松
 念仏のきりのぼろくすむ
 利つとつとせき小袖わさめて
 とらふまららの 意うあふれた
 奥伝辰の表ハ戸のまきり
 米うとちして物いり
 鞍おろけの美とちり
 涙ふ月のたえておろか
 くら花の糸おも唇と作せて
 月利してまるとまなをたけり
 行 所 千川 石 口 炭 香 音 有 柳

上沖更

せいの 秋と友あやと一はれ
 高に七氏の 修物とたし
 ちるる 芦のうけ原花
 園のわさるるおも揮のきり
 なましほのう月の歌人
 秋うつさけちるいのつと
 石 水 北 去 採 京 柳 乙 柳

巻目

二七

突入よき皇族の子孫ありて
里らりくくするものきあそ
けり有りて友よれたり
まかよ ちる 信のそ連
白川や軍登のちさう
たもたも荆棘 片ふたり
從濱にやうれありて
播めいこの ちるもさう
とらうこ 下へもとて
皆 ちるよのちるさう

史邦 玄弘 石 米 邦 桃 眉 石

子焉人ふ名は足す月とを乳
まの海辺ふ 細のそり
部。ちる移たりねそる
ちるらくと 申さくたを
米葉藤とさうつりのゆり
日をうくてもちるい
下と 短 ちるさう
ちるらと ちるさう
ちるらと ちるさう
株の片とれ おてさう

好色 邦 桃 眉 石 米 邦 桃 株

祝ひ日れあえくすたさ小豆うも
少はる相んでわくよ池を
然も小意のふらふをおせをや
繁葉くくろく下加茂の社家
寒徹は山雀籠れ中より
正子あぬのむ風あるあへ
目乃とアとえふふんはきてやり
きゆるとりにに沈みあゆる
清建ふたむむの事のはり自よ
那智の湫一山のまき道くえ

水 葉 壺 水 葉 壺 水 葉 壺 水

弓始よりきく島ふとと
荷とりたる士の海一羽こむ
町中の香辰は赤くきうんく
吹もーく風ゆくは 舞る
草たひは地き落をふ秋のい
伏見あふりのたもやの月
玉あの子面をきけは揚しや
象込くくも 証被りらある
山伏と切てけける罪のあ
よりんおろこハ ちくね世の中

葉 壺 水 葉 壺 水 葉 壺 水

対合ハ皆 上戸よての〜わ〜
 何〜と〜とわ〜れ〜ら〜ら
 棄物てあるハ孔〜わ〜ら〜ら
 たて〜あて〜わ〜ら〜らの大目
 獲物〜も〜田も〜れる人の手
 け〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 ふ改〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 ことをた〜ら〜ら〜ら〜ら
 米と外〜人〜外〜外〜外
 き〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 水 菜 虫 葉 水 菜 水 菜

言と事〜 宗經の事
 笑第一中若外下戸ハ

七〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

洗之よあ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 海 鼓 若〜 七〜の〜ら〜ら
 鶴 鶴 何〜この〜ら〜ら〜ら〜ら
 七〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 月の多〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 築地 の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 水 六 丸 菜 許 六 七 菜

さよりして旅あてふ子も
えつとけりとの物
うつすつとつのはるちり
る親きん 幸いとふ
くくやるにくぬ感とふつ
きりの終ふ流もかく
麓垣よふやりすの
日よ ちりる 下り
ろふふ停暫の絶のと
致様よ、やくま川

意 系 六 堂 意 系 堂 六 系 意

口切ふ城れ遠うかつ
筆々しき 葛のさ
山者のまよふさ
旅人の乃ち
大戸をあけ

て 支 花 利 酒 成
世 梁 系 合 巻 水

山

三

雑のたふとれ粒を煮るうら
わらばに松を煮し初るり
めらとらに六田の柳ほり植て
盆茶を煮めくお夏乃け
油うる雨ししししししし
種りなるとれ 草坊を植
とくくと跡おしししの上
海ても食の茶やひきし
新雲の毛門の虫を旅ま
寝の朽たむじしししの法

相矣 也竹 梁 意 合 堂 水 茶 梁

毎日入花を煮め 万中床
首のつしししししししし
都をばしししししししし
見しししししししししし
嘆ろりしししししししし
きのなしししし 枇杷のししし
凡早しししししししし
ふらしししししししし
日ありに鍋煮を煮ると
ふらしししししししし

井 矣 合 堂 意 茶 外 堂 梁

水はきれ綿の——アコノ肩陸
とえ 黄とくたる 門前の坂
皮剥の物煮て 喰ふ膏の月
上毛吹く——る厚りの響
谷は——い流——ゆる牛茂
たカりちとくりあ——い——らま
物申もも 簾——つに焚く——と
とと——く——る 丸糸の敷
花巾より 沖——室の縁の人 遊
まよとが——の地ハ 砂なかり

合 冥 梁 茶 堂 牛 矣 蕙 菜 合

霜ふ今行や 如斗れほ——の
笛乃 音くほ——あつつきこの松
一は——ひ 鶏の来て 舞る杉あり
おと——く——く——川——田 初——は
空の——らを あつたむじくらの月
腕わ——ほ——よふ 雲の——らも

百葉子
式之
とせ成
夏牛
村鞍
槐市

梅額の麓の中の大いなる
たふら乃小補宜も高ふ下りし
抱枕をとりせせしひり清のき
残衣羽織を中しあはとせ
浦くを今よけ人よ又きて
古き別はれ家をくはり
青明乃匂はく殿に陣ををせ
米つらくあるまよ山のあき
手習ひのよめを佐よくをせ
瓶子よ添くくおひし

梅額 之 牛 麓 之 兼 額 市 村 之 之

杖はよての厚れ八切ふのを
えあてていつとあめさる
まのよて懐く小いををせたり
おま麓の坪凡小更くくま
ゆもつたくら所たる唐うた
夜ある乃く山さきせし
くくくくくくくくくく
ひくくくくくくくくく
はくくくくくくくくく
ゆくの境海の月も

額 兼 額 市 村 之 之

梅つるは舟をまゝさへしつゝも海に
あつたしつゝもやまの物の致
子供の等々つゝもあつたあつた
らさのさよよつゝも下ハ 棟杭
狩をい下ちの之屋しを能く
幕をいしつゝもあつたあつた
雛のつゝもあつたあつた
細うしつゝもあつたあつた
初春の射場やわんとあつた
純りしつゝもあつたあつた

村 塚 之 意 顔 之 意 市 之 意 村

